

飼養管理

初秋の鶏の管理

若雌の管理

今年3月、4月ごろ餌付した若雌は、そろそろ産卵を始め12月頃のもので産卵も相当多くなってくる時期でもあります。

この頃は、朝晩は涼しくなってくるが、日中は相当暑い日が続きますから、鶏舎内の風通しをよくし、室温の低下をはかる必要があります。飼料は大雛用のものから成鶏(産卵鶏用)に切替える時期であり、白色レグホーン種では大体孵化後150日令前後がよいとされていますが、これは、雛の素質、ふ化時期、管理方式によって異り、あまり日令だけにこだわらず、何れの品種でも1群の鶏のうち約3～4割程度が産卵を開始した時期が適当と思われます。

一般にバタリーや、ケージ飼育のような立体式の育成では、手飼い飼育より初産日令が早い傾向があります。

また、4、5孵化の鶏は1、2月ふ化の鶏にくらべて、初産日令がやや遅い傾向があります。これは、大雛時代のいわゆる、性成熟期の日照時間が非常に影響しているようであります。養鶏家のなかでは、1、2月雛の性成熟の早くなるのを抑制するため、大雛時代に動物性蛋白を極端に減らしたり、または全く動物性飼料を与えないようなことがやられていますが、これはあまりにも度を過ぎたやり方で、体軀さえ出来れば、あまり極端な調節は必要ないかと思われれます。大体白色レグホーン種で初産時体重が1.5キログラム程度であればよろしい。

反対に4、5月雛では初産がおくれがちであり、これは前にも述べたように、日照時間が影響している場合が多いので、鶏の体重、日照時間等を考慮に入れて9月下旬頃から13時間(日照時間を含めて)位の点灯が効果があります。

早春孵化の鶏は、産卵は日毎に上昇はしてきますが、3月上旬以前のものは、年内に軽い換羽にかかり、休産するものができますから、これも産卵率の最高から下向きカーブに向い始めた時期に13時間程度の点灯を必要とします。

老鶏の管理

前年孵化の鶏を一般に老鶏と呼びますが、前年秋以前に孵化した鶏は、そろそろ換羽のため休産にはいる時期であります。

この換羽はいろいろ原因がありますが、性腺ホルモンによるものが主なもので、この換羽の誘因となるものは、日照時間外気温栄養などがあげられます。

換羽の時期は、鶏の品種、個体、飼養管理によって違いますが、大体9月頃から始めて2～3ヶ月で終るのが普通であります。

7～8月にかけて換羽を始める鶏は、早期換羽型で、換羽に要する日時が最も長く、反対に10～11月にはいつて換羽を始める鶏は、換羽期間は短くしたがって、産卵期間が長いので優れた鶏といえます。また、秋に換羽しない鶏もまれにいますが、これ等の鶏は長い期間に亘って徐々に換羽するので休産することなく、極めて多産鶏にみられる型です。

換羽中は鶏が非常に神経質ですから、あまり鶏を驚かせないようにすることと、換羽の初期は食慾が減少しますが、新羽の生長が始りますと食慾も旺盛になりまた、新羽の生成には多量の蛋白質を必要としますから産卵鶏と同様に良質の飼料を多食させるようつとめるべきであります。

前記のように大部分の老鶏は、初秋から秋にかけて換羽するものでありますが、これを極力抑制して産卵を継続させるためには、当然、点灯飼育が必要となってきます。

点灯時間は、若雌の場合より1時間程度長くして、14時間(日照時間を含めて)位が適当であります。

しかしながら、今年中に完全に淘汰してしまう予定のものでは、それ以上の点灯時間として、場合によっては終夜点灯(日没から翌朝の日の出まで)もよいと思います。ただ終夜点灯は相当に鶏の体力を消耗しますから、一時的には産卵は上昇しますがあまり長続きしません。

この点灯による経済的な効果は、県養鶏試験場では勿論、その他の各県においても試験した結果は若

岡山畜産便り 1961.08

雌、老鶏を問わず何れも相当な効果が認められています。

畜産緊急センサスによると、岡山県内の50羽以上の養鶏農家のうち鶏舎に点灯設備を設けてあるものは38.7パーセントとなっており、他県のそれに比べても、あまり良いとはいえ、今後点灯設備を施し産卵量の増加をはかる事が大切と思われま

す。ただ、注意しなければならないことは、点灯つまり、人工光線を使用することとは、不自然なことであり、これに100%の信頼を持つてはいけな

衛 生

初秋の頃に若雌に発生しやすい病気は、感冒とジフテリー症があげられます。感冒は気候の変わり目に発生しやすく、つまり初秋の頃は日中は真夏のように気温が上昇しますが、夜間は相当に気温が下がり、1日の温度差が大きくなり感冒の原因になります。

その他、感冒やジフテリー症にかかりやすい素因としては通風採光の悪い鶏舎、寄生虫による栄養障害、緑餌不足からくるビタミン欠乏症があげられます。

対策は原因となっていることがらについて、改めることと、同時に病鶏1羽に対しペニシリン1~2万単位、ストマイ20~40ミリグラムで両者を混合して筋肉内に、連日2~4日間くらい連続注射すると効果があります。また、これ等の抗生物質と、サルファ剤の併用は一層効果が高いようでありま

す。これ等の感冒や、ジフテリー症は産卵が低下してから治療を施したのでは、効果が少なく、早く発見して対策を講じることが大切と思われま

す。いま1つの若雌の病気としては、鶏痘があります。これは5月頃予防接種をやっておけば、ほとんど100パーセント防げるものでありますが、予防液の有効期限の過ぎたものを使ったり、接種の方法が悪かった場合は感染することがあります。

冠や脚に発痘したいわゆる鶏痘特有のカサブタだけであれば、産卵低下はありますが、4~5週位で自然に治り、死ぬる鶏はほとんどありません。しかし、これに前記のジフテリー症を併発しますと、なお一層被害が大きく、斃死鶏もでま

す。この治療は、ジフテリー症を併発のものは前記の治療を施し、冠や脚のカサブタはクレゾール石けん液2~3%で患部を拭いた後、病巣部をピンセットで摘みとり、ヨードチンキかペニシリン軟膏を塗ると効果がありま

す。患部が固くなっているものは、温湯石けん液で洗って、表面を軟化させてから薬品を塗布します。

(岡山県養鶏試 岩本技師)